

談 室

19世紀が生んだロマンチスト，ライファイゼン

野や山裾がいっせいに生命力ゆたかな色彩で覆われる五月のドイツ。その魅力を讃えた詩や芸術については昔から枚挙にいとまがないが、中でも僕はH. ハイネの詩にR. シューマンが音楽をつけた「美しい五月に」Im wunderschönen Monat Mai（「詩人の恋」の第1曲）がとりわけ好きだ。それは詩や音楽がこの上なくロマンチックであるというだけではなく、19世紀中葉という激動の時代に呼吸し、不安を覚えながらも新たな胎動を期待する人々の瑞々しい感性を彷彿させるからである。

ライン河畔のノイヴィート市の一角にファーター(父)・ライファイゼンの記念碑がたつている。ボンの近郊に住んでいた僕は、色とりどりの草花が心地よい芳香を漂わせる五月によくこのライファイゼン像を訪れ、19世紀中ごろの農村に想いを馳せた。

封建制の長い眠りから覚め、ドイツ社会は新しい時代の到来に沸き立っていた。東部ドイツ、西部ドイツの構造的差異を抱えながらも資本主義経済は爆発的なエネルギーを誇示した。イギリスからかなりの遅れをとったとはいえ、一部の関係者は意気揚々とこの時代を謳歌したであろう。それは歴史的事実が示している通りである。ただ農村、特に小農地域においては、近代化の過程は複雑に推移した。生産力の著しい上昇が約束されながらも、ほとんどの小農(農業の家族経営)は資本主義的商品・貨幣経済の進展に自力対応ができず、多くの場合自らの市場対応を、高利貸しを筆頭とする前期的商人資本に依存せざるをえなかった。ここに資本主義経済の進展と小農経営の存在という矛盾から生じる悲劇が始まった。

五月の風景はこの時代もすべての農村住民をやさしく、美しく包み込んだのであろう。しかし少なくない農民は経済的な没落を余儀なくされ、債務奴隷の道を歩まねばならなかった。当時の文献・資料はこうしたプロセスを生々しく伝えている。

そんな窮地を救ったライファイゼンという人物は、僕自身の研究によれば、

冷静な判断力を備えたきわめて柔軟なリアリストであったことがうかがわれる一方、壮大な夢を抱いたロマンチストでもあった。少なくとも僕はそう思っている。資本主義経済の進展は生産力の限りない上昇を保証する一方で、封建時代に確立した三圃制農法を崩すプロセスでもあった。19世紀中ごろには耕地強制がほぼ一掃され、経営の個人志向が定着するなど村落共同体は解体の一途を歩むのであるが、共同地がまだまだその役割を主張するなど、様々な古い村落機能が残存した。19世紀中ごろのドイツ農村は正に過渡の様相を呈していたのである。

ライファイゼンの果たした功績については、今日まで様々な角度から数え切れないほどの讃辞が送られている。そうした中、僕自身、ひとことで強調するならば、農村に残存する村落自治の諸機能(それはもとより領主権も及ばないものであった)を最大限に活用しながら、農村に信用組合という形の(近代的)金融制度を導入し、農村住民にその大切さを自覚させたことであろう。彼の果たした啓蒙的な役割、これこそが最も強調されるべきなのである。しかし、それは壮大なロマンであった。

爛熟した社会において現状を肯定しながら浅い呼吸を繰り返す人々よりも、混沌とした過渡期に手探りでロマンを求める人物像ははるかに生命力と魅力に富む。農民の惨状に胸をいためたが故に、農村に新しい秩序を導入しようとしたライファイゼンは、そのような意味で極めて魅力的な人物であっただろうし、まさに19世紀中葉という時代が生み出した人物でもあった。僕はこれからの研究の時間、ロマンチスト・ライファイゼンにもっと光をあてて、彼ののこした膨大な書簡を読みなおしたいと考えているのである。

五月の陽光にたたずむライファイゼン像は、他のどの季節におけるよりも輝いていた。

五月の訪れの喜びを繊細な音符で綴ったR. シューマンは今年生誕200年を迎えた。彼の音楽は今なお人々の心に19世紀の熱いロマンを届けている。そして8年後には、ドイツの農村社会に壮大な夢を運んだロマンチスト・ライファイゼンの生誕200年祭がやってくる。

(酪農学園大学酪農学部教授、日本協同組合学会会長 村岡範男・むらおかのりお)